

## 山の辺の道紀行

平成 18 年 10 月 22 日 (日)

近畿双松会歴史ウォーキング第 1 回行事

報告者 押田 良樹

今年から新たに近畿双松会の行事に加わった「歴史ウォーキング」は 10 月 22 日(日)、「山の辺の道ウォーキング」として実施された。参加者は松高 5 期から北高 21 期まで幅広く、家族を含めて 26 名となった。高校 8 期の加藤尚子さん、高校 9 期の岩成哲男さんは遠路松江からの参加である。天気は申し分のない秋晴れ、集合場所の近鉄桜井駅前を 9 時過ぎに皆元気よく出発した。

今回のウォーキングには天理市ボランティアガイドの会の植村勝弥氏に同行をお願いし道中いろいろな説明をしていただいた。



桜井の町を抜け貯木場や三輪素麺の製粉工場などを横に見て行くと、やがて前方に三輪山の優美な姿が見え、ほどなく初瀬川(大和川上流)に出る。この近くに欽明天皇の磯城嶋金刺の宮(しきしまのかなさしのみや)があったといわれ、橋を渡ると「仏教伝来の地」の石碑と説明板があった。

ここで植村氏の最初の説明があった。仏

教伝来の時期には 538 年(上宮聖徳法王帝説)と 552 年(日本書紀)の二説があるが、そのため同じ継体天皇の子である欽明天皇(母は大和系の手白香皇女)と安閑・宣化天皇(母は北陸・中部系の尾張目子媛)が対立して皇位が並立していたのではないかなどの論争を生んでいるという、最初から古代史の謎に迫る興味深い話であった。



このあたりは、最古の交易市「海柘榴市」(つばいち)の跡もあり古代の政治・経済・文化の中心地域だった。少し行くと海柘榴市観音がある。紫式部など平安の女流文学者は、長谷寺へ参る途中この観音に詣でたという。そしてこのあたりは古代の歌垣の行われた場所でもあり女性のストレス発散の場所であつたらしい。

この地に因んだ有名な万葉歌に「紫は灰さすものぞつば市の八十のちまたに逢へる児や誰」があるが、入り口にあった今東光和尚の書になる歌碑は「灰」を「仄」と読

んで「紫はほのさすものぞ…」となっていた。

また少し行くと右手に金屋の石仏がある。コンクリートの小堂の中に釈迦如来と弥勒菩薩の石仏が並んでいる。鎌倉時代のものといわれるが明治の廃仏毀釈のとき、このあたりの道端に放置されていたのを村人が移したそうである。石仏の向かい側に意外にも美術館がある。喜多美術館といってルノアール、ゴッホ、ピカソ、安井曾太郎、佐伯祐三等の作品がある。開館は10～17時で月・木が休館。入館料1000円。

山の辺の道から少し外れて左手に入り込んだ場所に崇神天皇の宮と伝えられる磯城瑞籬宮（しきみずがきのみや）がある。このあたりを「磯城鳴」という。ひっそりとしたたたずまいで、伊勢の皇大神は最初ここに祀られていたという。境内の脇に磐座（いわくら）がある。太古の人々は神は自然の岩や巨木に宿ると考えそれらの「依代（よりしろ）」を祭っていたので特別大きな建造物としての神社はなかったとの植村氏の話である。神社が今のように立派な建物になるのは仏教が伝来し立派な寺院が建てられるのに対抗したためであるという。



次の平等寺に向かう道端に小林秀雄書になる「山邊道」の道標がある。同じものは3箇所あるようだ。平等寺、この寺はかつ

て大神神社の神宮寺として栄えたが、廃仏毀釈で廃寺となり、のちに再建されて現在に至っている。聖徳太子の創建とも伝えられている。朱色に塗られた寺院と周囲の豊かな緑が溶け合っって明るい雰囲気とする。



鐘楼があり「平和祈願の鐘」とあったので記者は100円を納め突かせてもらおうと「ゴーン」と重厚な音が響き渡った。

崩れた土堀、木々が鬱蒼とかぶさる道を過ぎるとやがて大神神社に至る。



昨年秋のバス行楽会で天川村へ向かう途中訪れたときは駐車場から参道を上ってきたが、今回は神社の右手から境内に入ったことになる。大神神社のご神体は三輪山なので本殿はなく拝殿の奥にある三ツ鳥居を通し三輪山を拝するという、原初の神祀りの様が伝えられている。祭神は大物主神であるが、この神はわが出雲の大国主神（大己貴神（おおなむちのかみ）ともいう）の「幸魂（さきみたま）・奇魂（くしみたま）」

であるとされている。出雲と大和の神がなぜ結びついたのか興味あるテーマである。

近くには摂社の久延彦神社、狭井神社や大和平野が一望できる大美和の杜があるが時間の関係もあり省略し昼食休憩の場所桧原神社へ向かう。

道はいかにも「山の辺の道」の雰囲気が出てきた。ガイドの植村氏は元気に先頭を歩く。双松会の期でいうと松高1期の年齢であるが大変若々しい。



柿やみかん、茄子に枝豆などいろいろな果物や野菜を並べた無人店をよく見かける。

このあたりは本当に「ものなり」のよい所だ。

右手の三輪山からけもの道がおりていて猪のものらしい足跡があった。このあたりの猪は食べ物も多く恵まれている。

古色蒼然とした玄賓庵の門を通り過ぎる。ここは平安時代、玄賓僧都が隠棲したと伝えられる庵で謡曲「三輪」の舞台として有名とのこと。

やがて桧原神社に到着する。崇神天皇のとき、宮中に祭っていた天照大御神を豊鍬入姫命（とよすきいりひめのみこと）に託してこの地に遷し、「磯城神籬（しきひもろぎ）」を立て祀った「倭笠縫邑（やまとかさぬいのむら）」との伝承がある。それで別名「元伊勢」と称される。その後、垂仁天皇の

時、皇女倭姫命が新たに皇大御神を祭るにふさわしい地を求めて八咫鏡を持って各地を巡行することになり、大和の国を始め伊賀、近江、美濃の諸国を巡ったのち、伊勢の国の度会（わたらい）の地、五十鈴川のほとりへ「祠」を定めたのが伊勢の内宮（皇大御神）ということである。植村氏は説明用にたくさんの史料を持参しておられ、あとで頂戴したので参加者にコピーをお渡ししようと思う。

大神神社にあるが見られなかった三つ鳥居がここにあった。三輪山に向かって建っており珍しい形である。

西の方は大和国中（くんなか）が一望でき、特に春分・秋分の日二上山に落ちる夕日の眺めの素晴らしさは有名である。

先日美しい宍道湖の夕日を見る機会があったが、ここにも一度はその時刻にやって来てみたいものである。今日は秋晴れだが霞がかかっている大和三山はともかく二上山、葛城山ははっきりと見ることはできなかった。

時計も正午を過ぎたので境内の思い思いの場所で昼食となる。周りは柿畑が多く、のどかな雰囲気である。

昼食後鳥居の下の石段で記念撮影をする。



今回は現地までは行かなかったが、ここから西へ降りて行くと池のほとりに倭健命

の作と伝えられる「大和は 国のまほろば たたなづく 青垣山ごもれる 大和し 美し」(やまとは くにのまほろば たたなづく あおかき やまごもれる やまとし うるわし)の歌碑がある。筆者は川端康成であるがこれには逸話があるそうだ。川端康成は歌碑を建てる地を探して歩き、この地を気に入ったのだが、清書をする前に亡くなってしまった。そこで生前の原稿の中から字を拾い出して刻んだのだという。従って筆ではなくペン書きの文字である。

またさらに西に行くと内田康夫の浅見光彦シリーズ「箸墓幻想」の舞台になったホケノ山古墳、さらにもう少し先に有名なその箸墓古墳(倭迹迹日百襲姫命大市墓(やまとととびももそひめのみことおおいちのはか)がある。大和の人は皆卑弥呼の墓と信じて疑わない(ように思われる)。

昼食休憩で元気を取り戻し桧原神社を出発する。巻向川を少し迂回して渡ったあたりの岸に棟方志功の書になる歌碑がある。



歌は柿本人麻呂の「痛足河、河波立ちぬ 巻目の 由槻が嶽に 雲居立てるらし」(あなしがわ かななみたちぬ まきもくの ゆつきがたけに くもいたてるらし)だが、歌より棟方志功の人気なのか、石の表面は拓本の墨で黒ずんでいる。先ほどの川端康成書の「大和は…」が人気ナンバーワンで次

がこの歌碑とのことだ。山の辺の道にはこのような歌碑が40くらいはあると思われる。歌碑に注目して歩けばさらに興味が深まることだろう。

右手の三輪山に別れを告げると巻向山、龍王山が姿を現す。その景観はまさに「たたなづく青垣」、大和の原風景そのものだ。



このあたりでもう桜井から5キロ位は歩いている。道は起伏に富み曲がりくねっている。我々の郷里が出雲の国だということを知って植村さんは山の辺の道からはずれて東へ坂道を上り普段は案内しないというところへ我々を導いてくれた。



そこは「相撲神社」。近くの穴師坐兵主神社(あなしにいますひょうずじんじゃ)の摂社で、出雲出身の野見宿禰(のみのすくね)を祀るところだという。

神社といっても社殿はなく鳥居だけであるが片隅に野見宿禰を祀る祠があり土俵の

跡のようなものがある。そのほか境内はまばらに木の生えた草地という感じである。

ここで垂仁天皇のとき出雲から呼ばれた野見宿禰と当麻蹴速（たいまのけはや）が初めての天覧相撲をとり野見宿禰が当麻蹴速の腰を蹴って（殺して）勝ったがそれが相撲の始まりと伝えられている。

当時は格闘技のように蹴り合いも認められていたのだろうか。野見宿禰は出雲に縁の深い天穂日命（あめのほひのみこと）（高天原から国譲り交渉のため大国主命のもとへ派遣されたが大国主命に心酔してしまい3年経っても復命しなかったという）の14世の子孫であると伝えられ土師氏、のちの大江氏、菅原氏の祖先だと伝えられる。

出雲国造家だった千家、北島家の先祖も天穂日命といわれている（北島家の館があった松江の大庭にある神魂神社は天穂日命の創建と伝えられている）ので天神様とは親戚ということになる。

しかしこの野見宿禰、出雲風土記にも登場しないし地元での活躍の跡があまり窺われない（私の勉強不足かもしれませんが）ので出雲出身といってももうひとつピンと来ない。皆さんはどうでしょうか。

それにしても日本の相撲初代王者を出した島根県が第12代横綱陣幕久五郎（現在の東出雲町出身、1829～1903）以来横綱はおろかこれという力士を生んでいないのは寂しい限りだ。少年時代から幕内の郷土力士を応援した記憶は皆無である。

さて、相撲神社同様話も横道にそれてしまったので山の辺の道に戻ることにする。

刈り取りの終わった田が多いがまさに「黄金田」もある。休耕田にはセイタカアワダチソウだろうか大群落を見せている。

これは太古には決して見られなかった風景だろう。

やがて前方左手に大きな古墳らしい地形が見えてきた。第12代景行天皇陵（渋谷向山古墳）で全長300mの巨大前方後円古墳である。



この陵は江戸時代の終わり頃まで第10代崇神天皇の陵とされてきたが、日本書紀に景行天皇は「倭国の山邊道上陵に葬りまつる」とあるのでここに比定し直された様である。このあたりには数多くの古墳があり、柳本古墳群と呼ばれている。

もう少し行くと第10代崇神天皇陵（行燈山古墳）がある。こちらは全長240m。

東側には櫛山古墳がある。こちらは全長160m珍しい双方中円墳である。

崇神天皇陵の濠は元々現在より狭かったのだが柳本藩主（織田信長の弟有楽斎の子孫）が皇室崇拝を口実に幕府から濠の拡張工事資金を引き出し、ちゃっかり領地への水の供給源を確保したそうである。今も昔も為政者は中央からカネを引き出す知恵に長けているようだ。

今回予定に入っていた長岳寺は時間の都合で見送り、最後の黒塚古墳へ向かう。

柳本陣屋の近くの濠に囲まれた小高い丘に登ると石室跡がコンクリートで示されて



いる。

平成10年に三角縁神獸鏡が過去最多の33枚も出土したことにより一躍有名になった。卑弥呼が魏王から賜った鏡に違いないとか、いや国産のものだとか邪馬台国の所在に大きく関係することだけに熱い論争を呼んでいる。丘の下には黒塚古墳資料館があり古墳の内部を再現して展示してある。

これで今回の行程は終わり、大変丁寧に熱心に案内をさせていただいた植村さんに謝意を述べお別れし、近くの JR 柳本駅に向かった。

天候に恵まれ古代のロマンと日本の原風景のような自然にも触れることができ、さらに歴史の勉強にもなった。そして双松会という絆でつながった先輩・後輩との交流は本当に楽しく有意義なものだった。

心地よい疲労感を感じつつ桜井線の電車に乗り込んだ。

今日の行程

近鉄桜井駅→仏教伝来の地碑→海柘榴市  
観音→金屋の石仏→磯城瑞籬宮→平等寺→  
大神神社→桧原神社（昼食）→相撲神社  
→景行天皇陵→崇神天皇陵→黒塚古墳

今回のコースは山の辺の道の南半分に当たります。次回は残る北半分、天理から長岳寺までを歩きたいと計画しています。

こちらのコースも天理教教会、石上（いそのかみ）神宮、夜都岐神社、竹之内・萱生（かよう）環濠集落、そして今回行けなかった長岳寺と見所がたくさんです。

歴史、walking 好きの会員の参加をお待ちしています。